２０１８．５．２７

大草

読書メモ

87．山折哲雄「道元」清水書房（1988.9）

88.　佐々木閑「律に学ぶ生き方の智慧」新潮社（2011.4）

**＜山折哲雄「道元」から＞**

　この本は、道元の一生とその思想の概要を説明している。但し、正法眼蔵には触れていない。以下にその一端を紹介する。

道元は「一顆明珠（いっかみょうしゅ）」という一巻を説法した。ここでは、詩人としての道元の資質がはなやかに開花している。慎重に選び抜かれた美しいことばと宇宙の彼方にまで浸透していく澄んだイメージが幾重にも重なり合って交響する世界が繰り広げられている。

「一顆明珠」とは、尽十方界としての全宇宙がそのまま眩しい光明を発する球体であり、この無限大の球体はそのまま我々の全身、全心としての多彩な光を放射してあらわれている。すなわち、「愛せざらむや、明珠かくのごとくの彩光きはまりなきなり」というのだ。

次に「即身是仏」の主張は、人間意識の厳密なる探究者としての道元の面目が躍如としている。「心」の働きをその微妙な振動にまで追求し、それが次第に不動の「心」へと転じていく道筋を照明する手法は、おそらく何人の追随をも許さないだろう。「即身是仏」とは、まず、「心」とは霊の働きなどというものからは隔絶したものであると説くことから出発し、一切の現象がすなわち「心」であることを確認する、しかし、「心」に執着すれば万物と自己はたちまち喪われるであろうという。「心」が脱落しきったとき、「心」は「仏」となる。（119頁）

　最後に「洗浄」と「洗面」の二巻は、徹底的に不浄を厭う道元の生理的な清潔感を生々しく伝えている。それは、日常的な生活場面における道元の倫理的な潔癖性と呼応しているというべきであろう。

　道元という生の人間の内部には、詩人的なみずみずしい感覚、人間心理に関する意識的な探求心、そして生理的かつ倫理的な清潔感という三つの資質が分かちがたく結び合っていたとわたくしは思う（120頁）。

　現実の宋朝の禅林（禅宗一門）は、まさに秩序統制の名をかりた官僚機構において世俗化し堕落していた。「清規」（「永平寺知事清規」という道元の著書の略。ここでは中国禅林の伝統を指している）は、教団の権威主義体制をたんに合理化する条文に堕していたのである。そしてなによりも、そのような教団の状況に反撥しこれを批判したのが道元その人ではなかったのか（151頁）。

　道元は、北陸入山後、臨済の禅を繰り返し批判してきている。教団の拡充と世俗への関わりという問題は、おそらくたんに道元の側だけの問題ではなかった。永平寺の有力な信者である波多野義重など在俗信者達からの要請もあったとみなければならないであろう（152頁）

⇒コンプライアンスの立場からすれば、道元は超優等生である。道元のような倫理的潔癖性を具有する人材が企業を経営することが望ましい。道元の倫理性、潔癖性はどこから得た特質なのであろうか。倫理性の高い人物を研究することも、コンプライアンスに役立ちそうである。倫理性を身に着けた経緯とその方法など参考になると思う。

**＜佐々木閑「律に学ぶ生き方の智慧」から＞**

　仏教界で独自に定められた法律集である「律」を紹介し、仏教修行者が組織運営のために作った諸規則であると同時によりよく生きるための智慧が含まれていることを解説した本である。その一部のみ紹介する。

・仏教は、仏、法、僧が揃っていなければ仏教といえないものである。この三つの基本要素を三宝という。

　①仏とは：仏とはブッダのことである。「釈迦を敬慕し、その教えを信頼すること」それが仏教の必須要件なのである。

　②法とは：法とは「ダンマ」=「教え」のことである。原始仏教は、全て口伝であったが、釈迦の死滅後500年頃から、それを文字で伝えるようになった。法が文字化されると、その文書そのものを崇拝の対象と教えるようになった。仏の教えである法を正しく伝えていない宗教は仏教とは呼べない。

　③僧とは：僧とは「サンガ（僧伽）」のことである。僧とは、人の集団を指す呼称である。正確には僧侶が４人以上集まって集団生活を送っているその組織が僧である。個々の僧侶のことを指したものではない。そしてそのサンガを運営するための規則のことを律という。

・同じ大乗仏教でも日本だけは違う。日本は、仏と法だけでなく、三番目の僧（サンガ）までも変えてしまった特殊な国である。変えたというよりも、初めからサンガの制度を採り入れなかったのである。それは、仏教導入期の日本の朝廷が仏教を政治の一環、外交の道具として扱ったことに原因がある。

・律の専門家である鑑真和上が唐の国から渡ってきたとき、日本にも正式なサンガが誕生したのであるが、仏教を「国家のしもべ」として扱ってきた大和朝廷は、形式としてのサンガは承認したものの、そのサンガに運営の自治権を認めようとはしなかった。僧侶の数がどんどん増えて、日本中にサンガができて、多くの民家が仏教の信者となって、皆が仏教に心の安らぎを見いだす、そんなことを朝廷は望まなかった。仏教の僧侶はあくまで朝廷のために働く公務員であり、お上に従う公僕でなければならない。従って、サンガなどという独自の自治集団を認めるわけにはいかなかったのである。それで、サンガの運営規定である律の導入を拒否した。律がなければ、いくら形だけサンガの体裁をとりつくろっても意味がない。

・こういう歴史的事情のせいで、日本にはサンガの制度が正しく導入されなかった。日本は、唯一「サンガがなくて律もない仏教国」なのである（36～36頁）。

・禅宗の僧堂にある規則はサンガの律に似ているが、律ではない。それは、禅宗の僧侶たちが独自に決めた禅宗独自の規則である。これを「清規」という。

＜「律」が最重要とされる理由＞

・仏教では、精神集中による修行だけが心を改良する唯一の方法だと考えるので、労働は極力排除されなければならないと考える。従ってどうあっても生活の糧は外部の一般社会から恵んでもらうしかないのである（これは釈迦が決めたことである）。そして「周りの人達に養ってもらう」という、こういう虫のいい考えを実現するための最低条件は、「社会の人達が「「この人になら余ったご飯を上げてもよい」」と思ってくれるような立派な人間として行動することである。

・サンガにおいて定められた行動基準が「律」であり、この「律」を遵守することによりサンガの秩序が保たれると同時に社会の人達の尊敬を得ることができるのである。従って、サンガ及び僧侶の存立のために、「律」が重要となるのである。

・仕事を一切せず、仏道修行という非生産的な生活だけをやり続け、それでいて社会から尊敬される状態で繁栄させる」という恐ろしく困難な状態を維持してきた「律」の機能は、並みの人間に生みだせるものではない。その効能は2500年に及びまだこれからも続く。最初に「律」の核となる部分を作った釈迦とその志を継いで数百年の間に完成形にまで持って行った弟子たちの見事な洞察力に感服するばかりである。

＜サンガの組織理論＞

・サンガの目的：好きな修行だけやって生きて行くこと

・目的達成方法：仏道修行

・前提：社会から尊敬されることによりご飯等の恵を受けること。そのための「律」の順守。

⇒組織を維持して行くために厳格に「律」を遵守し、違反者は厳しく罰した。

＜「律」とは何か。次の3つからなる＞

・波羅提木叉（はらだいもくしゅ）：禁止事項（EX淫行の禁止、殺人の禁止）

・経分別（きょうふんべつ）：禁止事項の条項毎の解説

・犍度（けんど）：集団の行動マニュアル（EX満月の日の全員集会での反省会の実施）

＜出家社会の重要ポイント＞

・俗世間に依存しないと生きていけない。（托鉢で食料を得ることが原則）

⇒サンガもなく律もない日本仏教って一体何なんだろう！！

以上